

2014年8月31日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 10章 15～19節

説教：誰が本当の味方なのか

1 あらすじ

今日の箇所は戦争の話ばかりでうんざりしてしまうかもしれません。本当の味方とは誰なのか、そのところから神の恵みを考えていきます。

ここまでのあらすじをふり返ります。ダビデはあるとき、隣の国であるアモン人にも神の恵みを施したいと考え、外交使節団を送ります。ところがアモン人はダビデを疑い、使節団に対して大変な侮辱を加えて送り返してしまいます。ダビデはそれでもなおアモン人に神の恵みを施すべきであると考え、彼らが心を開いてくれるまで待つことにします。

けれども、アモン人はダビデのそんな思いに反してアラムという地域から軍隊を雇い、イスラエル攻撃の準備を進め、なお心を閉ざし続けるのです。こうなるとダビデも動かざるを得ません。将軍ヨアブをリーダーにして軍隊を出します。途中、敵の挟み撃ちに遭うということもありましたが、金で雇われたアラム軍はイスラエルの前から逃げ出してしまいます。いっぽうのアモン人はアラム軍が逃げたのを見て、町の中に閉じこもってしまいます。ヨアブはそれ以上戦うことをやめて、エルサレムに戻ってきました。それが前回までのあらすじです。

2 アラムとアモン人

1) 金で動くアラム

アモン人がアラムから兵隊を雇おうとしたとき、アラムの王たちはアモン人が差し出してきたお金を見て、かなり前向きに受けと

めただろうと思います。戦争になれば多少の犠牲者は出るでしょう。でも、それでも十分に利益を見込める戦いになるのではないか。もしかしてうまくいくと、アラム軍の軍事力をダビデに見せつけければ、ダビデは怖じ気づいてしまうかもしれない。もしそうなれば戦わずして勝つ訳ですから、まったく損害を受けない。丸儲けになる。そんな見積もりを立てました。

ところがこれが甘い見積もりであったことが後になってわかりました。イスラエルはアラム軍を追い散らしてしまったのです。それでどおなったのか。15、16節を読みます。

「アラムは、自分たちがイスラエルに打ち負かされたのを見て団結した。ハダデエゼルは使いを送り、川向こうのアラムを連れ出したので、彼らはヘラムに來た。ハダデエゼルの将軍ショバクが彼らを率いていた。」

アラムとは、イスラエルの北の地域に住んでいた部族全体を指すことばで、今の地図で言えばちょうどシリアにあたると言われています。そのアラムの中で最も力を持っていたのがハダデエゼルでした。彼は、このままではダビデにいつか完全に征服されてしまうと考え、アラム全体に呼びかけ、イスラエルに攻め込もうとします。非常に大きな戦いだったと思われませんが、ダビデは結局将軍ショバクを倒します。これをきっかけにして、アラムはイスラエルと講和条約を結び、イスラエルの支配下に入ることになりました。

神に選ばれたイスラエルの王ダビデ。彼に刃向かう者は、すべてこのようにされていく。

神はイスラエルに勝利を与えてくださる。そのような結論で締めくくりたくなるかもしれませんが。でも、この箇所はそんな単純な話ではありません。

2) 金で動かすアモン人

もう一方のアモン人は何を考えていたか。それを次に見ます。ダビデと戦う前、自分たちの戦力は見劣りがしていました。でも資金だけは豊富にあります。お金の力に物を言わせませす。国際見本市に出かけ、次から次へと最新の兵器を買いあさっていきます。でも兵器だけそろえても兵隊がいなければ戦争はできません。自前で優れた兵士や軍隊を養成していくのにはかなりの時間が必要です。それでは間に合わない。そこで手っ取り早く外国の軍隊を雇います。なにしろ資金だけは沢山あります。このようにして、アモン人はあつという間に軍事国家に姿を変えていきます。目の前を行進していくアラムの軍隊を見てアモン人は思ったでしょう。これで自分たちはイスラエルを倒し、幸せを手にすることができる。なにしろアラム軍はアモン人のためにと協力を惜しまない。頼もしい味方、頼もしい親友に見えました。

こうして見ると、アモン人は何を頼りにしていたのかがはっきりわかります。目に見える力です。その力を手に入れるためにはお金が必要である。突き詰めれば、お金さえあれば何でもできる。安全を買うことができる。平和を買うことができる。幸せを手にするることができる。そう信じていました。

今の時代もまったく変わりません。口ではきれいごとを言っているけれど、結局最後はお金ではないか。お金をちらつかせれば、人はしっぽを振って寄ってくる。お金さえあれ

ば人の心も動かすことができる。そう信じて疑わない人たちがいます。人々は、力の源であるお金を手に入れるためにまっしぐらに突き進んでいます。

では、あり余るほどのお金を持っていたアモン人は本当に幸せを手に入れたのか。

3) 裏切るアラム

19節を読みます。「アラムは恐れて、それからはもう、アモン人を救おうとはしなかった。」

この戦争でアモン人の金庫が空っぽになった訳ではありません。まだまだお金はあったはず。そのお金を手にして、何度もアラム人の所を尋ね、もう一度軍隊を派遣してくれるようにとお願いをしました。以前なら二つ返事で、「よっしゃ」と引き受けてくれたのに、今はどんなにお金を積んでも動かかない。頼もしい味方だと思っていたのに、急に及び腰になって誰も助けようとしません。そうになってしまいました。

アモン人は最初、アラムこそ自分たちの本当の味方であると信じていました。見えるものこそがこの世のすべてであり、見えるものにこそ自分たちを救う力があると信じて疑いません。ダビデはイスラエルの神を信じていると言っているけれど、そんな見えないものを信じるなどばかげている。そんなものが味方になる訳がない。そう思い込んでいました。

結果はどうなったか。アラム軍は手のひらを返すようにして、アモン人のもとから去って行きます。救おうとはしません。お金だけもらって、いざとなったら救いに来ない。これは裏切りです。アラムは本当の味方ではありませんでした。

私たちの本当の味方は誰なのでしょう。すべてを失っても、変わらずに味方となってくれる方が本当にいるのでしょうか。こんな話を聞いたことがあります。会社を経営していて順調に業績が伸びていたときは、「社長、社長」と言って多くの人々が愛想を振りまきながら寄ってくる。けれども会社が傾き、破産した途端に人々は蜘蛛の子を散らすように去っていく。親友だと思っていた人間が、お金がなくなると自分を見下すような態度に変わってしまった。会社が倒産して、初めて誰が本当の友人であるか、味方なのかしみじみとわかった。それ以来人を信じることができなくなった。そんな話を聞きます。

3 本当の味方

アラムはアモン人の本当の味方ではないことがはっきりとわかりました。では誰が本当の味方だったのでしょうか。最初からいなかったのか。いいえ。いたのです。誰か。ダビデです。10章2節を読みます。「ナハシュの子ハヌンに真実を尽くそう。彼の父が真実を尽くしてくれたように。」

ダビデは、アモン人の味方になりたいと考えていました。なぜ味方になりたいと考えたのか。アモン人が持っているお金が魅力的だったからでしょうか。いいえ。ハヌンの父親であったナハシュが生前、ダビデに対して親切してくれた。なので、その息子に神の恵みを施したいと考えた。ハヌンが魅力的な人物であったとか、お金持ちであったとか、すぐれた信仰をもっていたとか、そんなことではない。ただハヌンの父親がダビデと親しくしていた。それが理由です。ハヌンにしてみれば、棚からぼた餅式の話です。ダビデが、「恵みを施したい」と申し出たとき、これは

絶対何か裏があるに違いないとハヌンが疑うのも無理がない。あまりにも話がうますぎるのです。

実は、これが神の救いなのです。あまりにも話がうますぎる。あまりにも条件がよすぎる。なぜ私たちは救われるのか。なぜ神の恵みを受けることができるのか。私たちが神に対してよいことをしたからではない。むしろ、神を十字架につるすというひどいことをしたのです。そこまでひどいことをしたなら、普通はどうなりますか。すぐにさばきを受けることになります。滅ぼされるはずですが、けれども、私たちは生かされています。

アモン人も同じです。ダビデに対してひどい仕打ちをしました。戦争までしかけました。でも、アモン人は滅ぼされません。アラムの方が先に倒されていきます。なぜそんなふうにするのでしょうか。たまたま国際情勢がそうになったからではありません。神はどこに目を留めておられるのか。アモン人を救いたいのです。そのために何をされたか。本当の味方は誰なのか、はっきりとわかるように、そのためにアラムが倒されました。彼らは本当の味方ではない、そのことを知らせようとなりました。アラムはダビデと平和条約を結びました。それを見せることで、アモン人もダビデと和解するようにと促しているのです。神はアモン人のことを心配しているのです。彼らにも神の恵みを施したいのです。本当の味方になりたいのです。扉を閉ざして町に閉じこもってしまったアモン人が、扉を開けるのを待ち続けます。

私たちの本当の味方は誰なのでしょう。ダビデは見えない神を信じました。目に見えない神は一度だけ人の姿となられ、私たちの目に見えるようになってくださいました。私た

ちは、自分勝手な思いでこの方を利用し、この方が何もできなくなると簡単に裏切り、見捨てました。でもこの方は、十字架でいのちを捨ててくださり、私たちに裏切らない、本当の味方であることを身をもって示してくださいました。

どこまで味方なのでしょうか。私たちがすべてを失っても味方とされます。私たちがどんなに弱くなっても味方であり続けます。決して裏切ることはありません。

神の恵みは、どこまでも私たちに追いかけてまいります。